

162 フランスで選ばれた日本の偉人（その2：東日本大震災）（2023年5月25日）

Le Monde 社が出版している「漫画で描く歴史上の偉人」シリーズに関連して、前回はシリーズで取り上げられた明治天皇と東郷平八郎が生きた明治時代をご紹介します（※）。今回は、三人目の吉田昌郎に注目します。

吉田昌郎がどのような人物であるか質問したら、果たしてどれだけの日本人が、正しく答えられるでしょうか。吉田氏は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の際に福島第一原子力発電所の所長でした。吉田元所長は、福島第一原発の事故発生時に、前例のない状況下の極度の緊張の中で、命の危険にさらされながら事故処理に当たりました。その任務は、どれほど厳しいものであったか、体験した人にしか分からない壮絶なものであったと想像します。しかし、日本人に、吉田元所長がフランスで歴史上の偉人に選ばれたと言うと、多くの人は驚くのではないかと思います。それは、決して福島原発事故の重大さを軽視しているわけでも、所員たちの勇気ある仕事を知らないわけでもありません。福島原発事故を引き起こした東日本大震災では、2023年3月現在で15,900名の死者が確認され、未だに2,500名以上の方が行方不明となっています。死者や行方不明者の多くは、津波によるものです。震災で自宅や仕事を失った人、生活が一変した人は数えきれません。そして、2023年2月現在でも3万人以上が、自宅へ戻る事ができずに避難生活を余儀なくされています。



地震が発生した2011年3月11日14時46分、私は東京の外務省にいました。突然激しい揺れを感じました。日本は地震が多い国ですので、多少の揺れには慣れています。その日の地震はいつもの揺れとは異なることはすぐにわかりました。日本人は子どもの頃から、地震が発生したら机の下に身を隠すよう教えられていますので、すぐに職場のデスクの下に入って揺れが収まるのを待ちました。マグニチュード9.0の巨大地震が発生し、暫くして東北地方で大きな津波が発生したことが報じられました。東京の交通機関は麻痺し、その日は多くの帰宅困難者が発生しました。そして、翌日には福島第一原発で水素爆発が発生しました。その様子が放映されると、大変な事態が発生したことが分かりました。震源から離れた東京でも、しばらくの間は強い余震が続きました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

震災発生時には、フランスを含めて世界各国から支援の手が差し伸べられました。震災が発生して12年が経過し、津波で破壊された地区は再建され、住居や



職場を再建して新たな生活を始めた人もいます。しかし、何年経っても、震災で家族や友人を失った人たちの悲しみが癒えることはありません。まだ、故郷に帰ることができない人がいることも忘れてはいけません。福島第一原発の廃炉に向けた作業が進んでいますが、まだ道半ばです。

吉田元所長が、このシリーズで取り上げられた背景には、フランスの原子力に対する高い関心があるものと推測されます。吉田元所長を取り上げた2冊は、2022年に発行されました。事故の発生から10年以上が経過してこのような漫画が発行されたことから、福島第一原発の事故が世界に与えた影響の大きさが分かります。また、私たちは、震災を通して得た教訓を思い返し、それを活かしていく必要があることに改めて気付かされました。

